

# 平成 26 年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果分析

## 第 2 学年

東久留米市立南中 学校

### ( 社会 科 )

#### ◇結果分析Ⅰ

##### <正答数分布から>

正答数が最も多い生徒の割合は中間層（14問～19問）、最も少ない割合は最下位層（0問～7問）である。最上位層（26問～30問）は東京都平均よりも多いが、下位層（8問～13問）も東京都平均よりも多く、生徒数の少ない生徒から多い生徒にかけて幅広く分布している。

##### <到達目標値達成の生徒の割合から>

到達目標値（22問）に達成している生徒の割合は28.4%であり、東京都平均より1.6ポイント下回っている。正答数分布でも分析したが、最上位層が多い一方で、下位層も多いため、到達目標値に達成しない割合が増えている。

#### ◇結果分析Ⅱ

##### <観点別結果から>

「関心・意欲・態度」については、東京都平均、学校平均ともに、社会科が一番高く、生徒が関心を持ちやすい教科だと考える。しかし、他の3観点は、数値があまり高くなく、特に「知識・理解」は、東京都平均を下回っている。

「技能」があまり高くない一方で、「取り出す力」「読み取る力」の領域が高いことは、問題の形式に対する苦手意識によるものであると考えられ、問題集などで反復練習を繰り返すことで、回答することに慣れることにより、「技能」の観点の正答率が上がると考える。

「知識・理解」の課題に関しては、実際の授業中の様子を見てみると、生徒の多くは関心を持って授業に参加し、発言も少なくないが、授業内や家庭での反復練習による知識の定着が弱いためだと考える。また、小学校での既習事項を用いた中学校での未習事項である公民的分野の課題は、知識を活用する力が身につけていないからだと考えられる。

##### <領域別結果から>

「取り出す力」「読み取る力」が高くなっている。「関心」が高いため、資料を読み取る姿勢が育まれている成果だと考えるが、「技能」の観点への影響が弱く、しっかりとした技能を身につけさせる工夫が必要だと考える。

また、「関心・意欲・態度」が高い割に、「解決する力」に課題がある。これは、社会的事象を生徒自身の課題と結びつける力が弱く、当事者意識をもって解決しようとしていないからだと考えられる。

## ◇課題

### <結果分析Ⅰから>

- 正答数が最上位層や上位層の生徒に、思考力・判断力・表現力の一層の伸長を図るとともに、技能をつけるための指導をしていく必要がある。
- 正答数が中位層、下位層の生徒には、基礎的・基本的な内容の一層の定着を図るために、反復的な学習を促すとともに、既習事項を活用し、思考力・判断力・表現力を養う必要がある。
- 正答数が最下位層の生徒には、基礎的・基本的な内容を理解させ、反復学習による知識の定着を図る必要がある。

### <結果分析Ⅱから>

- 「思考・判断・表現」に関しては、現行の学習指導要領でも重視されているため、授業において様々な取り組みをしている。今後も継続的に続けていくことで、力をつけることができると思う。
- 「技能」があまり高くないことに関しては、調査実施前より感じているため、今年度の授業では、資料の読解力を高めることを目標に取り組んでいる。毎時間、必ず1つ以上の資料を読解し、発表を積み重ねていくことで、「技能」の向上が図られると思う。
- 「知識・理解」の課題に関しては、反復練習による知識の定着をはかるため、復習小テストなどを実施したり、家庭での復習を促したりしていくことが必要だと考える。また、知識を活用する力の課題に関しては、歴史的分野における時代を大観する学習のように、既習事項を活用し、課題解決をする学習を充実させることが大切であると思う。